白井城 ①

（白井城址（本丸及びささ郭）村指定文化財 平成16年3月31日指定）

この城の総曲輪は、北側の吹屋・松原と東側の白井町を包んで、東西950メートルの北遠構と、南北650メートルの東遠構の堀に囲まれている。東遠構中央の閻魔堂塚地点に東の城戸、西は吹屋の中程を貫いて鯉沢との崖端に城戸があり、吾妻街道となる。源空寺裏の道祖神の地点に北の城戸があった。この総曲輪の河岸段丘上に吹屋屋敷・松原屋敷、段丘下に白井町があり、城郭を囲んでいる。青堀から北郭・不動の砦・金毘羅砦・三ノ丸・二ノ丸・本丸と続く。不動の砦近くに追手があった。

本丸は吾妻川寄りに、北から突出した台地端に築かれ、西面は30メートル程の断崖となっている。三角形に近く、周囲は高土居で、武者走りとなっていて、南端の屋倉台は天守台ではなかったかと思われる。本丸門は出桝形で、野づら積み石垣（太田道灌の構築といわれる）が現存、近くに三日月堀がある。堀は空堀で、三ノ丸・二ノ丸・本丸と西側は吾妻川に入っている。東側は深く、帯曲輪となっていて、裾石垣のくずれがある。腰郭（現在なし）・笹郭、あとから付加されたらしい南郭・新郭の搦手、以上が白井城の全様である。なお、城の護りとして、玄棟院・源空寺をはじめとして大小の寺院を段丘上に配置し、一旦緩急の備えとしている。

構築は誰か、1430年頃、城主長尾景仲といわれ、後の城の攻防は中世を語る北関東の歴史でもあり、唐の詩人杜甫の「国破れて山河在り、城春にして草木深し」の詩は、白井城そのものを詠じてくれているようにも思える。太田道灌の入城・上杉管領家の在城・真田昌幸の攻略、奪回とめまぐるしい変転のあと、天正18(1590)年、前田利家により攻略され、近世の暁を迎えるのである。

「注」歴代城主　（　）は不分明

長尾景照 ── 長尾景忠 ── 長尾景行 ── 長尾清景 ── 長尾景守 ── 長尾景仲 ── 長尾景信 ── 長尾景春 ── 上杉定昌 ── 上杉顕定 ── 長尾景英 ── 長尾景誠 ── 長尾憲景 ── 長尾輝景 ── 長尾政景 ── 本多広孝 ── 本多康重 ──（牧野忠成）── 戸田康長 ──（井伊直孝）── 西尾忠永 ── 本多紀貞

1 白井城址

源空寺 ③・④

（本多氏の墓・梵鐘 村指定文化財 昭和58年6月27日指定）

白井城の北、松原屋敷に位置し、法然山と称し浄土宗の名刹、本尊は阿弥陀如来。京都の知恩院を本寺とし、開基は天正18(1590)年で白井城主本多広孝、開山は無哲で、江戸幕府より寺領50石の朱印状を賜っている。現本堂は寺伝によると寛政3(1791)年の建立で、正面7間、側面6間、向拝は単層入母屋造りで、間口19.6メートル、奥行14メートル、屋根は当初は茅葺きであった。境内の老松は樹齢100年を超す名木である。鐘楼は安永7(1778)年頃の建立、梵鐘は白井太田氏と佐野天明丸山氏の合作で、鋳物師太田氏は吹屋小沢氏のことである。城主広孝夫妻、孫紀貞の墓も境内奥にある。明治中期の医師吉原玄宅の墓も、常に参拝の香華が絶えない。吹屋西には、源空寺持の薬師堂がある。

玄棟院 ⑤

「法螺は吹屋の玄棟院」といわれ、曹洞宗雙林寺の末寺で、天正3(1575)年の建立。開基は白井城主長尾憲景、開山は操芝英旭で、白井三院の一つに数えられている。本尊は釈迦牟尼仏。時は戦国争乱の時代で、白井城は越後の上杉謙信の援護を受けたが、謙信の没後は小田原の北条氏に従った。西方より、岩櫃城主真田昌幸（甲斐武田方）の度たびの攻略を受け、寺運の興隆もなかった。近世となり、天和(1681)後、特に寺運の衰えはひどかったが、鶴天宝洲（雙林寺36世）が当寺の中興開山となり、天明8(1788)年、現寺院を再建した。玄関の「応供殿」は宝洲の書である。

境内の寒念仏供養の閻魔像は、元禄2(1689)年の作、安永3(1774)年集録の『上毛伝説雑記』は寺宝となっている。書院外の枯山水は信玄造りの名称があり、俳人加舎白雄の門人小見鳥路（文化5・1808没）の墓がわびしく立っている。鐘楼は昭和58(1983)年の竣工。

玄棟院 5

3 源空寺

本多氏の墓 4

清水下の地蔵尊 ⑥

清水下は大字吹屋であるが、市場町白井と同じ場所に位置していた関係から、近世以来、白井と村落共同体の意識を持って、生活圏を共にしてきた。北の木戸口に据えられているこの石の地蔵尊は、道行く人たちの安全を慈悲の眼で見守っていてくれると共に、子育て地蔵として土地の崇敬を受けていた。特に夜泣きに効くというので、お願生をかける家が多くあった。縁日は8月16日と24日である。高さ110センチ・幅36センチ・総高230センチと大型の比丘形で、享保元(1716)年9月吉日建立、施主54人、左手に宝珠・右手に錫杖を持って、今でも私たちをじっと見守ってくれている姿は、昔と少しも変らない。合掌礼拝。

北木戸と夜盗道 ⑦・㉜

北木戸は、白井町並みの北入口に当たる。白井城が廃城後、城下町から市場町に更生するようになり、利根・沼田・宮田方面からの者は、六斉市に来る人も、旅人も、この北木戸口から本町通りに入った。いつ頃からか、ここで路傍の地蔵に何をか祈り、金毘羅に行路の安全を願い、地神に感謝の賽銭をあげて、おもむろに、清水下・新田町・八軒町と歩は進められた。暮六ツ後・明六ツ前は木戸は締められていたから、その時は、白井城東遠構跡に設けられた幅1間（1.82メートル）の夜盗道を通っていて、この道も現存している。ここから町並みが始まるので、東側・西側とに分かれ、道路の真中を雨水処理の溝が通じていたが、現在は、群馬用水が流れる〝白井堰〟となり、町並みに潤いを与えている。

地神塔と金毘羅様 ⑧

この塔は地神と読み戸倉村（利根郡片品村）出身の書家藤賢和の敬書となっている。独創の篆書体で、人びとは「賢和の笹字」と称し、珍重称揚している。賢和は旅を好み、道すがら旅宿で求められると、地神とか庚申の文字を書いて、村人に与えている。この塔は賢和が82歳の時、文政11(1828)年春正月、新田町講中の建立であり、高さ220センチ・幅86センチ・総高320センチもある大石碑である。賢和はこの数年後に没している。

地神塔隣りの金毘羅様は、雨乞いや水先き案内として筏師や農民の崇拝を受けていたもので、寄進者19人の氏名がある。石工は信州木洗馬の渡辺門司郎で、高さ72センチ・幅43センチ・総高151センチある精巧な出来映えである。

新田町の薬師様と井戸 ⑨・㉑

市場町白井の北の位置を占める新田町が新しく構えられ、生活と旅客の便利を図るために井戸が掘られた。完成間ぎわ、底に光るものがある。眼もまばゆいような虎にまたがっている薬師如来像である。こんなことは百年に一度とないおめでたいことだと、井戸の完成を祝うと共に、〝虎薬師〟と名づけてお堂を建てた。「薬師井」と命名、「田なし水なし井戸深し」の白井の悪口は、この新田町では聞くことはない。この薬師は、半紙に「め」の字を書いてお願生をすると眼病がなおるといわれ、縁日の4月8日と10月8日は、町内から当番の人が出て参詣人の対応をしている。

蚕神供養塔 ⑩

蚕の守護神として蚕神を祭るが、この「蚕斎具ようとう」（蚕斎供養塔）は、蚕が疫病で大量に死滅したり霜害で桑がなくなり、穴を掘って埋めたりした供養に建てたものである。蚕は国字では「蠶」と書き、本字は「蠶」と書く。高さ196センチ、幅35センチ、総高242センチの自然石、達筆に彫られている。世話人は平方藤左衛以下6名、供養塔の開眼は享和元(1801)年4月、どこかの寺住職昌興という人が行っている。

⑧ 地神塔と金毘羅様

⑥ 清水下の地蔵尊

新田町の薬師様と井戸 ⑨

㉜ 夜盗道

⑩ 蚕神供養塔

11 土蔵造りの家並み

北向地蔵尊石堂 14

13 松原の道しるべ

白井宿の道しるべ 12

閻魔堂塚と庚申 15

土蔵造りの家並み ⑪

町並みの構成は江戸時代からで、大通りに面した家並みの中で、土蔵造りの残っているのは豊嶋屋と薬種屋の所である。豊嶋屋は江戸時代を通じての豪商で、町内に24文の私鋳銭を使用させていた。酒造・質屋も営み、幕末時には生糸で横浜貿易にも参画している。明治維新の際における世直し大明神暴徒の打ちこわしにも遭い、桧付き長屋門（延享頃～1745～建造）も傷められ、その傷跡も残っている。天保８(1837)年建造の３階造りの土蔵は現存。薬種屋の土蔵も豊嶋屋の長屋門と同時頃の建造で、市日には土蔵の下屋の戸を開けて、補気竜勢円などの家伝薬を販売していた。

白井町の道しるべ ⑫

（村指定史跡 昭和61年５月６日指定）

この道しるべは、白井町に至る中の坂を下りきった白井堰傍らに、高さ170センチ・幅38センチの角柱道標が43センチの台石に建っている。天辺に四角の穴があり、日光・江戸道（南面）、ゑちご・くさ津道（西面）、奴満多道（北面）とある。道しるべにしたがい町を北に進むと沼田城下町へ、ここを基点に中の坂を上がると草津道、南に行き渡屋の渡しより、八崎を経て、日光・江戸道に通ずる経済・交通・文化の要衝である。従って、往時の白井町には近郷近在だけでなく、諸国から文人墨客をはじめ、多くの旅人の通交があった。

嘉永２(1849)年８月、中町の住民で宮下与兵衛忠儀と曽根市兵衛幸定が建立。

松原の道しるべ ⑬

（村指定史跡 昭和61年５月６日指定）

この道しるべは、鯉沢交差点を東に向い、吹屋・松原屋敷に入り白井城跡へ向う四ツ角の北側に、高さ90.5センチ・幅30センチの角柱道標が自然石の台座に建っている。頂部は四角錐で「一番」と記している。「右ぬまた・双林寺道」「右まいバ志・おほご道」と前橋を〝まいばし〟と方言のまま標記し、「左ゑちご・あがつま道」裏に「嘉永３年庚戌６月吉日四ツ辻念仏講中」とある。今は、ほとんど旅行者の姿を消した古道には転変の懐古がしみてなつかしい。建立は嘉永３(1850)年６月である。

北向地蔵尊石堂 ⑭

この地蔵尊は、縁日が８月16日と24日であり、十六夜念仏・二十四夜念仏の性格がみられる。石堂前の手洗石と灯籠は対の陰陽石である。この手洗石の水で眼を洗うと眼病がなおるという伝えがあった。白井堰の上に北向きに安置されているのは、白井町の木戸が北口にあるからで、建立は延享３丙寅(1746)天12月吉祥日となっていて、信州安之慰の石工たちである。明治11(1878)年９月１日、町中こぞって再建したので、施主世話宮下半六以下38名が刻まれている。高さ201センチ、幅160センチ、総高296センチと規模も大きく、朱で着色されていた。横町の今井幸助が願果しにあげた木の扉が堂内にある。町内の真ん中に据えて合掌するのも、町の繁栄を願う庶民の素朴な信仰の現われと受け取れる。

閻魔堂塚と庚申 ⑮

ここは白井城の東遠構に設けられた東の城戸口であり、利根川渡河の攻撃軍に対する関門に当っていた所である。廃城後は、勢多郡八崎方面よりの旅人や、六斎市に来訪する人たちの東の木戸口となり、町の鬼門に当るというので閻魔堂が設けられていて、１月と７月の16日を閻魔王の斎日と称し、信徒の参詣があった。今、ここの堂は片付けられてしまったが塚（エマドウ塚ともいう）だけが残り、庚申塔が建てられている。庚申待が盛んに行われていたのが分かる。この塔は巨大（高さ232センチ、幅85センチ）な安山岩自然石で、万延元庚申（1860）年仲冬、時の町のリーダー宮下孫兵衛らにより建てられた。村内でも最高級の逸品である。

羅漢水の井戸と供養塔 ⑯・㉗

寛政頃（1789～）、白井町内約200戸の家並みの飲用水は、薬師井・延命水だけでは到底間に合わなかった。下之町の叶屋金井氏はこの窮状を救うべく、井戸開鑿のことに意を決し、私財を投じ、寛政7（1795）年正月4日、地鎮祭にこぎつけた。位置は、自家の前庭3、4間程の堰の傍らで、2月1日、当主故弥次右衛門妻貞光尼が一番鍬を下ろした。12日、4丈程の所で横に2寸余りの穴が開き、赤蛙が這い出てきた。また7尺掘り甘泉（うまい清水）が出てきた。竣工は3月6日、日数36日、人夫延475人がかかり、井戸の深さ4丈7尺、水深9尺であった。これよりさき、2月14日、先霊と井戸の成功を祈り、十六羅漢の供養を行った。赤蛙の珍事は瑞祥であると「羅漢水」と命名した。翌年春3月、雙林寺第37世玉州大泉が「羅漢井記」を記したので、寛政11(1799)年3月、これを刻んだ法華経供養塔を下之町が施主となって建立、盛大に法要が営まれた。塔の高さ345センチ、幅90センチの巨大なものである。

玉椿の道祖神 ⑰

この道祖神のある地域は玉椿とか、大宮とかいわれて、古代の白井はここを中心に発展してきたのである。しかし、中世から近世と、ここを通る道は、利根川岸の渡屋から前橋への通路となり、旅客の通交が多くなった。町並みが整備された白井町は市場町として近郷にない景気のよい所となり、そのため、悪霊や災厄が町へ入るのを遮り、安全を確保するため、古来から塞の神として祭っていた道祖神塔をここに建て、小児連を育成し祭らせていたのである。自然石の立派なもので、文字もよく、高さ129センチ、幅96センチ、総高177センチで、天明5乙巳(1785)正節吉日敬立、白井町小児連とある。浅間押し出しから2年後で、「右前橋道」と添刻され、道しるべの役も果している。近年迄、この地で小正月のドンド焼きが行われていた。

大宮姫神社 ⑱

旧村社で大宮に鎮座、現氏子数約180戸。社殿は古墳上に建てられていて、前は渡屋の渡しから、後ろは近世に架せられた掛岩の大宮橋から、勢多・前橋に通じ、白井町の五・十の六斎市には、多数の人の通交による参拝客もあったことがうかがえる。『延喜式神名帳』に大宮売命があり、『上野国神名帳』には正三位宮姫明神があり、榛東村の大宮神社と名称が似ていて、両社とも群馬郡司（郡長）が祭祀したと推測されている。『上野国郡村誌』に「社地東西25間3尺、南北24間、面積614坪、祭神天宇受売命」とある。例祭日は4月15日と10月1日である。

甲冑師明珍信家鍛冶場跡 ⑲

白井城曲輪内青堀近く、ここは松原屋敷と呼ばれていた。この付近には、白井城おかかえの職人たちが仕事場を構えていたが、畑から鉱滓が出土して、鍛冶場跡のあったことがわかった。そして白井城も、長尾氏が再び居城できるようになった景春・景英・憲景の永正・天文の頃、当時日本最高の甲冑師といわれた左近将監明珍藤原信家が、その得意とする筋兜をここで作成していたのが裏付けされた。信家は越後府中住で白井は仕事の出張先きであるが、その作品の銘＝於上州白井保松原作之＝などにより、信家の血気盛んな時期のもので、現在でも最高級の逸品と珍重がられている。白井住は1500年代の前半で、この鍛冶場跡の発掘も試みたくなる。信家寵愛の城主は、関東管領上杉謙信の「関東幕注文」の白井衆筆頭にあり、吹屋玄棟院開基となった長尾憲景である。

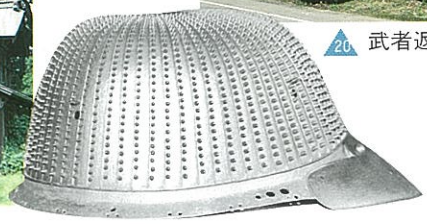
武者返しの町並み ⑳

白井町は沼田街道西通りに位置する在郷町であるが、白井城廃城後に、町並み整備がされた当初は、代官の支配を受け、南町方面には牢屋らしきものもあったが、常に空屋であったと記録にはある。町並みはその支配統治の必要から、大通りから家屋を斜めにずらして犯罪者などを捕まえるのに都合よいように建て、小溝の縁に立て石で細長い三角形の空地、いわゆる武者返しが全町にわたって形付けられていた。長い年月の間に次第に消滅し、現在、下之町から宮本町にかけてカーブのある位置に、この残影を見ることができる。

羅漢水の井戸と供養塔 ⑯

⑰ 玉椿の道祖神

⑱ 大宮姫神社



⑲ 甲冑師明珍信家の星兜

⑳ 武者返しの町並

22 薬師井鐘楼

25 延命水の井戸

29 薬師堂と華月堂

30 愛宕神社

つるべ井戸 ㉑～㉘

㉑ 新田町の井戸

町並みの井戸で、一番北に位置し明治5(1872)年頃、井戸無尽の方法で掘る。大正6(1917)年1月に積み替えをして、今も使用している。

㉒ 薬師の井戸

江戸時代初期である寛永元(1624)年頃、岡上代官の命により掘られ、涸れたことがないと言われ、今でも町並みの多くの家で使用している。

㉓ 八軒町の井戸

町並みの井戸の中で北から3番目に位置し、明治3(1870)年3月吉日に、井戸無尽の方法で掘ると記録にある。八軒での管理は昔から同じである。

㉔ 上之町の井戸

町並みの中ほどに位置し、明治2(1869)年頃、水不足解消のため町内寄合の結果、井戸無尽の方法で掘り、今でも使用している。

㉕ 延命水の井戸

江戸時代中期の宝永年中(1704～1710)、代官の命により掘られた。延命の水といわれ、人々は好んでこの水を飲んだ。現在も使用されている。

㉖ 大井戸

名のとおり、町並みの8カ所の井戸の中で一番大きい井戸で、多くの来訪者も利用している。明治元(1868)年頃、頼母子講により掘られ、今でも使用されている。

㉗ 羅漢水の井戸

町並みの中で、三番目に古い井戸。羅漢水供養塔に叶屋金井氏が、下之町の便を図るため、寛政7(1795)年3月6日に掘り上げたとある。

㉘ 宮本町の井戸

町並みの一番南に位置する井戸であり、天皇即位御大典を記念して、昭和4(1929)年1月に掘られたものである。

薬師堂と華月堂 ㉙

(華月堂厨子 村指定文化財 昭和62年5月29日指定)

源空寺は、天正18(1590)年8月、本多広孝・康重が白井城2万石の領主として封ぜられた後、菩提寺として建立されたが、西方約150メートル、現在の大字白井字吹屋の地に慶長5(1600)年薬師堂も併せて建立した。目薬師として霊験あらたかで、付近住民はもちろん近郷近在の崇敬もあつく、4月8日の縁日には、参詣人が踵を接するほどであった。尊像は、元禄ごろ(1688～1704)の作と考えられている。

現在の薬師堂は、天明4(1784)年2月焼失し、その後すぐ再建されたと思われる。

薬師堂の手前右側に華月堂があり、中に本尊の弥勒菩薩像が厨子内に安置され、その前に十二神将像が並べられている。この華月堂は、大字吹屋で管理している。

愛宕神社 ㉚

大字吹屋の総鎮守である愛宕神社は、旧村社で祭神は、火産霊神と建御名方命である。愛宕神社の現本殿の建立年代は、18世紀中期～末期ごろと推定され一間社流造りで正面に千鳥破風を付けており、覆堂の中に鎮座している。覆堂壁面には明治45(1913)年と安政6(1859)年の棟札が二枚かけられているが、明治の棟札が現覆堂のものであり、安政の棟札は前覆堂建立時のものと考えられる。

安政の棟札には「愛宕山　棟上吉日安政八己未十二月吉日　上家再建立惣村中」と記されている。

境内に欅の大木がある。祭日は毎年4月15日と10月15日に行われている。